

山本 登志哉  
(Yamamoto Toshiya)



早稲田大学教授

教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学会常任理事・編集委員長。日中韓越の人々による円卓ML 管理人ほか。

1959年青森県生まれ。呉服店の丁稚を経て京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。パートの保父をしつつ行った、所有行動の発生に関する修論研究で日本教育心理学会城戸賞受賞。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。所有行動の文化比較で同大学の教育博士号取得。共愛学園前橋国際大学在職時に始めたお小遣いの日中韓越共同研究に関わる理論論文で中国の朱智賢心理学賞受賞。

主著：『生み出された物語』（編著：北大路書房）、『Money as a Cultural Tool Mediating Personal Relationship』（共著：in Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology）、『アジア映画をアジアの人々と愉しむ』（共編著：北大路書房）、『孔子の国の子どもたち』（連載：ミネルヴァ書房「発達」）、『嬰幼兒“所有”行為与其認知結構的發展』（博士論文）など。

---

### 所有に関する行動の日中文化比較：子どもはいつ「中国人」になるか？

#### □ 二つの事例から □

事例1 その場にはいない友達の本を別の友達に貸してあげる（Dさん）

事例2 友達がいないときに、友達の鞆の中に自分のセーターを入れておく（Gさん）

#### □ 「文化的所有意識の法心理学：日中大学生の比較調査」（山本・片・小湊・渡辺 2008） □

☆上の2事例について日中の大学生に以下を問う

当該行為を行う人物の性格評価（25項目）

☆特徴的印象による人物像の日中対比

<日本> 「鈍感」で「変人」で「相手を侵害」しており、「好人物」とは正反対。

Dさんは「身勝手」でやや「無邪気」で、Gさんは「信用できない人」。

<中国> 「普通の人」で「情に厚く」「親切」。

Dさんは「自己主張が強く」少し「我が儘」で、Gさんは「気さくな人」。

⇒ 同じ場面を見ても、そこから受ける印象が全く正反対。

#### □ 「ズレの展開としての文化間対話」（山本・姜 印刷中） □

☆映画「あの子を探して（一個都不能少）」を見てその理解をめぐる日中大学生が討論

☆問題シーン例 スカウトされた小学生を親に事前に断らずに町の体育学校に行かせる

<日本> ありえない。利権が絡む？ <中国> 村の状況を見れば全く問題ない

⇒ 「子どもは誰のもの？」

#### □ 「他人のもの」について、それをどう扱うかについて □

<日本> 個人間の垣根が高い <中国> 個人間の垣根が低い

#### □ 「垣根」の高さの違いはいつから生まれるのか？ □

☆日本も中国も1才半くらいから以下のような行動の変化

「いきなり奪う」 → 「相手を否定して奪わなくなる」

⇒ 系統発生的にも単純な「弱肉強食」は否定されていく

「弱肉強食」の市場経済システムも「法の下での平等」が不可欠の基礎

□ 「平等」な関係の作り方に大きな文化差 □

☆ 2歳の段階で日中間に統計的に有意な差

<日本> 相手に断ってから物を獲得 (遠慮の関係)

<中国> 余り断らずお互い自由に使い合う (你我不分の世界)

□ 「友達のために」正反対の行動を取る

<日本> 相手に気を遣わせて悪いからおごらない

<中国> 相手のことを思っておごる

□ 文化的に成立する倫理感情 □

ある行為への倫理的感情的判断は、その社会の人の助け合いや関係調整のやり方に根ざし、きわめて早い段階から文化的に成立するもの。異なるやり方の間に優劣はない。その違いをどうお互いに自覚・認識し、差を豊かな多様性として構成するかが課題。